



3月24日撮影



3月25日撮影

屋練りを終え、いよいよ茅を葺きます。屋根下部を葺く、軒付け（のきづけ）をします。まず化粧茅、2層目には古茅を葺きます。針のような鉄串を使って下地の竹などに縄を通しくくります。





3月25日撮影



3月29日撮影

軒の厚みをつくっています。軒付けだけで6層にも重ねられています。職人の手で厚みや長さを確認しながら縄でしばります。数回茅を重ねた後は針金や縄を使い、割竹（わりだけ）で押さえます。





軒付けが終わり、上部の化粧茅を葺きます。職人4人で割竹を押さえ縄で縛っていきます。下の写真はカヤネズミの巣で、御殿場から搬入された茅の中で見つかりました。手のひらに載る大きさです。





土間側の下がった屋根に厚みがでてきました（上）。「平（ひら）を葺く」とよばれる作業は、①半分に切った茅の上の部分、②下の部分、③長い茅を順に重ね、2回繰り返して竹で押さえます。





葺くのに適した材料としてこしらえられた茅。写真上から「半分に切った茅の上の部分」「半分に切った茅の下の部分」「そのままの長さの茅」。これらを順に葺いていきます。(茅葺 | 平を葺く)





軒の上に茅の切り口が揃えられた面ができてきました。横にかけてられている丸太は作業の足場で、ここに乗りさらに屋根面を葺いていきます。(茅葺き | 平を葺く | 2021年4月8日ドローン撮影)





茅葺きが始まった屋根の内側は、近世からの燻された木材の色、若竹色と茅の黄金色のコントラストがみられます。（茅葺き | 屋根の内側 | 2021年4月8日撮影）





職人が手で茅を触り、より分け、職人同士でも手分けした部分の量に違いがないかを確認をしながら、長さの種類が異なる茅を繰り返し葺いていきます。（茅葺き | 平を葺く | 2021年4月8日撮影）





1層分の茅を載せ、一度押さえた後、茅の切り口を叩き上げ揃えていきます。職人の目で勾配を見ながら、ガンギとよばれる道具を使って叩き上げます。(茅葺き | 平を葺く | 2021年4月8日撮影)





2月の河津桜が咲くころに作業が始まり、4月には藤の花が綺麗に咲きました。郷土民家園に咲く花々によって季節の移り変わりを感じます。(2021年4月8日撮影)





雨の日には、屋根面を葺いていないところはシートを掛けて養生をします (2021年4月14日撮影)





ケバ取りとよばれる作業で、屋根の内側に飛び出た茅をはさみで切り取り綺麗に整えます。(ケバ取り | 屋根の内側 | 2021年4月14日撮影)





御殿場からトラックで追加の茅が搬入されます。この日で4回目の搬入で、葺き終わるまでには2,000束以上使われます。(茅の搬入 | 2021年4月21日撮影)





一度に運ばれてくる茅の量は、約300～400束あります。(茅の搬入 | 2021年4月21日撮影)





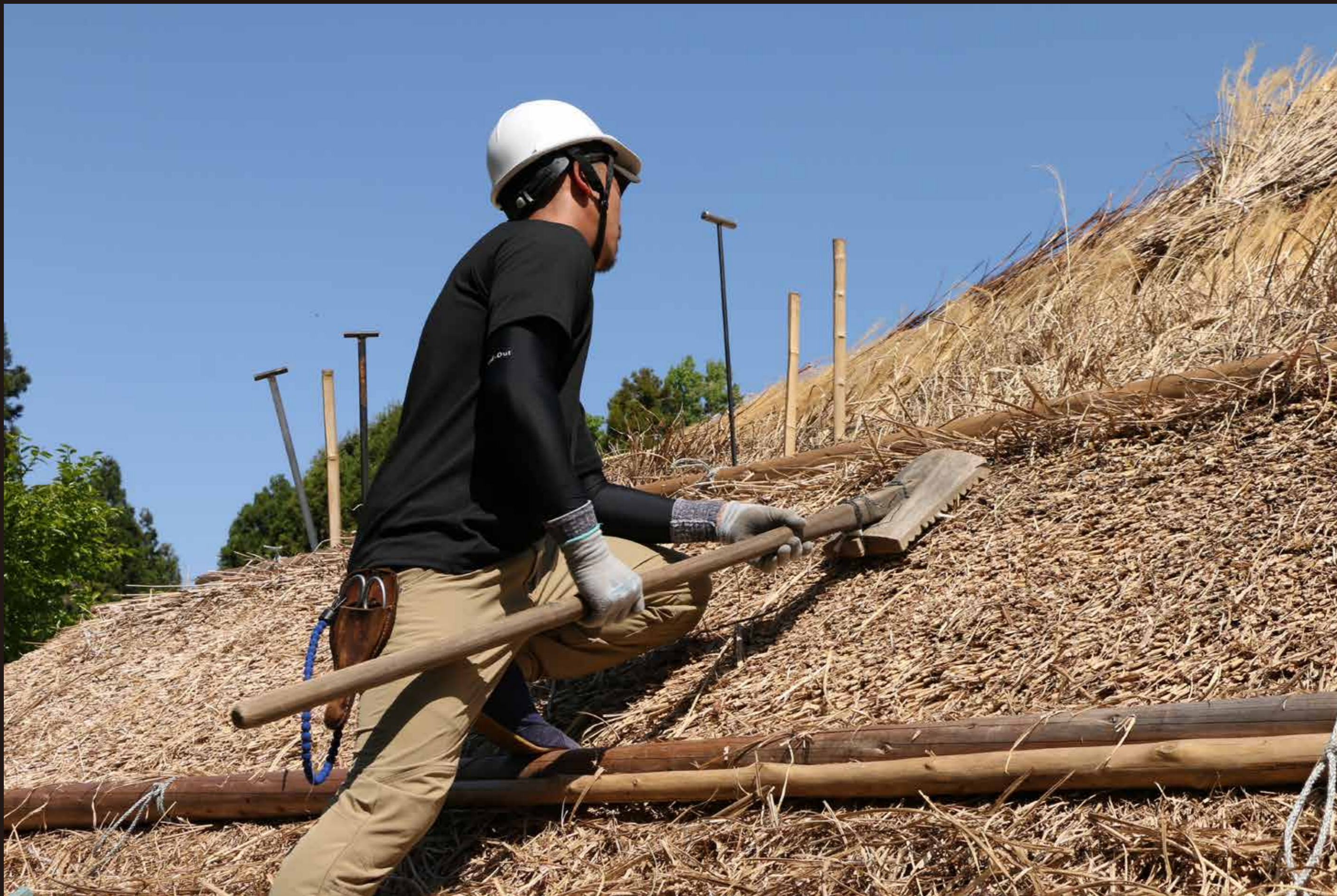
高さが上がるごとに足場の丸太も増えます。屋根面の半分程度が葺き上がってきました。(茅葺き  
| 屋根面を葺く | 2021年4月21日撮影)





屋根面に刺している鉄串や竹串は、足掛かりや、葺いた茅の留め具として、また材料の置場などに使います。職人によって材質や形状も様々です。(茅葺き | 屋根面を葺く | 2021年4月21日撮影)





屋根面を叩き上げてならず道具であるガンギの形も、職人によって異なります。(茅葺き | 屋根面を葺く | 2021年4月21日撮影)





茅葺屋根の勾配（屋根面の角度）は地方によって異なり、雪国は急勾配で、関東はゆるやかであるため、ガンギの角度も旧小川家の角度に合わせて変えています。（2021年4月21日撮影）





茅葺の道具は、親方が引退する際に譲り受けることが多いです。また、辞めるときに道具一式を屋根の中に入れてしまい、数十年後にその道具が出てくる話もあるそうです。(2021年4月21日撮影)





上に上がるほど屋根の面積は小さくなっていくので、葺き上がっていくスピードも上がります。(茅葺き | 屋根面を葺く | 2021年4月21日ドローン撮影)